池袋チャイナタウンと排外主義
横浜中華街との比較を通じて

瀧　大知 *TAKI Daichi*

―― はじめに
1 ―― 池袋チャイナタウンの形成と「東京中華街構想」
2 ―― 安全保障の対象としての「新華僑」
3 ―― 2つの「チャイナタウン」―横浜と池袋
4 ―― 通底する「植民地的まなざし」
―― 結びにかえて

【要旨】本稿では、日本における排外主義勢力が、どのような言説をもって排外主義を「正当化」してきたかを考察することを目的としている。「中国」に関連した排外主義者の言説戦略が、「池袋チャイナタウン」と「横浜中華街」とでは差異があることに着目し、比較分析をおこなった。「池袋チャイナタウン」で現れた言説は、新華僑を「脅威」、老華僑を「同化」した存在であると認識することで、「同化主義」による排外主義の「正当化」がおこなわれていた。さらに「反日教育」による「反日」的な国民／民族であると規定されることによって、新華僑と老華僑が「分断」されていった。また2つのチャイナタウンの文化的な差異にも、それが表象されていることを明らかにした。最後に、その根底に「植民地的まなざし」があることを仮説として提示している。

―― はじめに

（1）本稿の目的

2013年にヘイト・スピーチ（差別扇動表現）がユーキャン新語・流行語大賞の候補に選ばれた。2000年代に入り、日本社会では、排外主義を前面化した極右団体が台頭、毎週のように差別／排外的なデモや街宣が行われ、マイノリティや社会的弱者の人びとの生活を脅かしている。

本稿で試みたいのは、排外主義勢力が、どのような言説戦略を用いて自分たちの行為（排外主義）を「正当化」するのかを具体的な事例を通して描写することである。主に、その言説戦略において表出する「同化主義」と、その「象徴」に着目したい。

例えば、フランスの極右政党である国民戦線は、かつて、白人が他の人種よりも優れているという白人優位主義を展開し、人種差別的な政党とみなされてきた。こうした批判をかわすために、人種差別的な主張を和らげたかのように見せようとしている。人種間の不

平等性を前面に出さずに、イスラーム教徒をフランスに同化できない存在として扱い、文化的な差異を利用して排斥の対象としている（大嶋 2015:61）。その際に、文化的差異を示すものとして、ブルカ／スカーフなどを「イスラームの象徴」として、極端な意味づけを行っている。

日本の排外主義においても、同化主義が排外主義的な意識を押し上げていることは、田辺俊介（2011）や金秀明（2015）など、計量社会学的な分析から明らかとなっている。

つまり、排外主義勢力は（彼らの価値観に基づき）「同化しない」ということを自分たちの「正当性」を担保する言説戦略として使用し、その証明として、文化的差異を示す何らかの象徴を持ち出しているのである。

（2）分析対象と本稿の位置づけ

> その声は遠くからきこえてきた。メガホンで電気的に増幅された憎しみの声。
> 「中国人はー、池袋からー、でていけー」
> 野太い輪唱が続く。
> 「でていけー」
> 女の声だった。復讐を誓う声優のようにわかりやすい憎悪。
> 「シナ人はー、いちどー、死んでみろー」
> おふくろが遠い目で、西口一番街の先を見ている。視線の先はビルに隠れて見えないがウエストゲートパーク。（石田 2014:173）

これは、2000 年代前半にテレビドラマ化され人気を博した、石田衣良の小説『池袋ウエストゲートパーク』の一節である。2014 年に出版された作品の中で、池袋は排外主義の標的となっている。

世界各地のチャイナタウンを研究し、池袋もフィールドにする山下清海（2016a, 2016b）によれば、現在池袋駅の西口／北口一帯には、飲食店を始め、200 件以上もの中国系の店舗がある。池袋で生活しているのは、主に 1980 年代後半以降に渡日して来た「新華僑」が中心である。「新華僑」とは、1978 年に中国で文化大革命が終わり、改革開放政策によって海外へ留学や移住をしていった華僑のことであり、それ以前に海外へ出ていった人たちとその子孫は「老華僑」と呼ばれる。この池袋の西口／北口一帯を山下は「池袋チャイナタウン」と呼び[1]、池袋の観光名所として雑誌などで紹介されている[2]。

池袋チャイナタウンを排外主義勢力が標的とするようになったのは、2008 年頃からになる。きっかけは、2007 年に周辺の中国系店舗を中心に提起された「東京中華街構想」を『夕刊フジ』が報じたことであった。その構想阻止を名目として排外主義的なデモが行われた（山下 2016a:244, 2016b:47-48）。

本稿では、この池袋チャイナタウンをめぐる排外主義を分析対象とする。その理由は、

これまでの日本の排外主義研究において、中国（人）に対する排外主義があまりスポットを当てられてこなかったこと。そして、本事例における排外主義勢力が自分たちの言動を「正当化」する言説戦略に、中国を対象としたときの特徴が色濃く表れているからである。

日本の排外主義に関する重要な先行研究である、樋口直人（2014）では、2000年代以降から右派系の論壇、政治の中で活発化した、領土問題や歴史修正主義といった、韓国や中国などの東アジア諸国に対する排他的な右派イデオロギーが、排外主義運動が台頭する資源になったことを指摘する。こうした近隣諸国との関係悪化の中で、「国外にある『近隣諸国』と国内にいる『外国人』を強引に近づけて接点を持たせる」（樋口 2014:181）ことで、国内に住む「外国人」が、「安全保障」上の脅威とみなされるようになった。このような特徴をもつ日本の排外主義を「日本型排外主義」と定義している。

同様の指摘は他の論者からもされており、日本における排外主義は主に朝鮮半島や、中国といった東アジア地域の出身者が標的となりやすい（河合 2016; 清原 2015）。しかし、先行研究の多くは、韓国、在日コリアンに関する研究が中心（梁 2016; 高 2015）となっており、中国（人）に関連した分析は、ヘイト・スピーチ被害の実態調査（藤巻 2015）以外には、樋口らの研究でも一部に言及されているのみにとどまっている[3)]。

また、中国ルーツの人びとに対する排外主義勢力の言説戦略上の特徴として、老華僑を「同化」した存在と見なし、新華僑は日本を侵略する「脅威」として区別することで、新華僑への排除／排斥を「正当化」しようとすることがあげられる。池袋チャイナタウンはその「脅威」が潜む中国の首都として言及される。一方で、横浜中華街などの従来からある中華街は、安心な場所、「同化」を表す象徴として認識される。

このような言説戦略は、在日コリアンを始めとした、韓国／朝鮮系への排外主義には見られない現象である[4)]。

以上をふまえ、第1節では、池袋チャイナタウンの形成と、池袋が排外主義の標的となるきっかけとなった「東京中華街構想」までの流れを概観する。次に、第2節では、老華僑＝「同化」した存在、新華僑＝中国から来た「脅威」という認識が何に基づいて、新華僑／老華僑の分断を可能にするのかを明らかにする。その際に「反日」というキーワードを手掛かりに分析を行う。そして第3節では、文化的差異の象徴という観点から、池袋チャイナタウンと横浜中華街との比較から考察する。最後に、こうした認識をもたらす背景に、排外主義者からの「植民地的まなざし」があることを指摘したい。

1 ── 池袋チャイナタウンの形成と「東京中華街構想」

（1）新華僑の流入と池袋チャイナタウンの形成

池袋に多くの新華僑が生活するようになった理由[5)]は、文化大革命以降の開放政策による中国側の変化にある。また、同時期に日本側でも、1984年に当時の中曽根首相による「留学生10万人計画」が実施され、日本企業の中国への進出、工場移転が進むようになっ

た。こうした中国と日本の双方向的な変化によって、多くの新華僑が渡日するようになったのである（田嶋 2003:48）。

このような事情で日本へ来た人びとにとっては、池袋や新宿（新大久保）は居住に適した場所であった。主な理由は、安価に住める場所であったことや、日本語学校が数多くあること、JR 山手線の主要ターミナル駅である池袋は交通の便が良く、繁華街があり、日本語が上手く出来なくても、飲食店の皿洗いなど、アルバイト先が数多く存在したことなどが挙げられる（山下 2016a:234-235, 2016b:38-39）。

その中でも高い渡航費をかけて来る就学生にとって重要であったのが、安い住居の存在である。

池袋で生活をするアジア系外国人について調査した奥田道大は、「ニューカマーズとしてのアジア系外国人が実際に居住先を求めたのは，日本社会のあちこちではなく，東京をはじめとする大都市圏，とりわけ大都市インナーエリアに他ならなかった。」（奥田 2004:89）と指摘している。ここには池袋の衰退の歴史に関係がある。

その 1 つの要因が人口減少である。三浦展（2007）によれば、東京都の歴史は人口流入の歴史であった。日清、日露、第一次世界大戦を経て日本の近代化、産業化が進む中、地方と都市部の経済格差から 1920 年代頃より、地方から大都市圏へ仕事を求めて移動するという現象が定着した。この傾向は 1960 年代頃まで続いた。その結果、仕事を求めて地方から若者が流入したことにより東京都の人口は増加する。特に「団塊世代」が流入してくるようになると爆発的に人口が増えた。1954 年に「集団就職列車」（「集団就職」）が開始され「団塊世代」が中学を卒業する時代にピークを迎えると、1955 年に東京に住む 15～19 歳の人口は 90 万人弱であったのが、1965 年には 130 万人となった。これを三浦は、「移民としての団塊世代」と表現している。

地方から出稼ぎに来た若者たちにとって、受け皿となったのが木造賃貸アパートであった。池袋や新宿区の大久保駅周辺は、木賃アパートが密集する「木賃アパートベルト地帯」と呼ばれ地方出身の若年者のために木造住宅が数多く供給された[6]（和田 2006:133）。

しかし地方からの流入は徐々に減っていき、70 年代頃からニュータウンの開発が始まると人びとが郊外へと移住するようになる。その結果都市部の人口は伸び悩み、池袋地区では世帯構成に見合うような住宅の供給もされず、1980 年代には多くの老朽化したアパートが空き室化していくことになる（田嶋 1998:63）。

そのような老朽化した住宅が安アパートとして残った理由を山下は、戦後のヤミ市や区画整理と関係があると指摘する。戦後すぐに池袋駅周辺に形成されたヤミ市は、区画整理によって次第に撤去された。東口方面は東京拘置所（旧巣鴨プリズン）の跡地にサンシャインシティが建ち開発が進んでいった。しかし、区画整理はバブル崩壊の影響を受けて開発に遅れが生じた。その結果、東池袋四丁目･五丁目付近や西口／北口方面には、老朽化したアパートがそのまま残ることとなるのである（山下 2016b:39-40）。

以上のように高度成長期には、地価の高騰から借地の価格が高騰しバブル崩壊後は、地

方からの働き手が減少する。それにより多くの老朽化した木賃アパートが空き室化した。新華僑や同時期に流入してきたアジア系のニューカマーは、そうした借り手がなく賃金が低下した木賃アパートの借り手であった。疲弊した地元商店街にとっては、購買者として活力をもたらしてくれる存在でもあった（奥田 2004:91）。

こうした流れの中で、池袋は中国から渡日してきた人びとの集住地域となった。山下によればその要因として、1991 年に池袋駅北口にオープンした中国の食品スーパー「知音」（2010 年 1 月倒産）がある。それまで新華僑にとって中国の食材を入手するのは困難であったが、「知音」が出来たことで入手することが可能となった。それを求めて都内や埼玉からも多くの新華僑が池袋を訪れるようになる。その結果西口／北口は、華人同胞向けのビジネスが数多く展開され、池袋チャイナタウンが形成された（山下 2016b:41-42）。

（2）歪められた現実、「構想」から「抗争」へ

以上のような経緯で形成された池袋チャイナタウンで、2007 年に大きな出来事が起こった。それが「東京中華街構想」[7] である。池袋駅を中心に半径 500 メートルほどの中にある 200 店舗近くの中国出身者経営の中華料理店や食材店、美容院などがネットワークを形成し新たな「中華街」をつくろうという計画であった。2007 年 11 月には準備委員会を設立。2008 年 1 月には、中国語新聞をはじめ華人向けの記者会見を開いた（山下　2016b:47）。しかし、こうした動きは地元の商店街からの反発を受け、結果的に構想は頓挫してしまう。

> 池袋西口商店街連合会の三宅満会長は「仲良くやりたいと思うが、唐突なやり方だ。地元の町会や商店街活動に入って汗を流してからではないか」と注文をつける。「治安が悪くならないか」などと不安を口にする人もいる。（『朝日新聞』2009.5.8.朝刊）

地元の日本人住民にとっては、自分たちが生活してきた場所を唐突に「中華街」にするというのは受け入れられるものではなかった。

「東京中華街構想」を計画した胡逸飛は、雑誌『環』で移民研究を専門とする社会学者の鈴木江理子のインタビューにて「僕の構想では、地域の活性化のため、中国人だけで固まるのではなく、国籍にとらわれず『中華』というキーワードで純粋に経営者をつなぐネットワークとしての中華街だったけど、うまく伝わらなかった。」と地域住民とコミュニケーションに齟齬があったことを述べている（鈴木 2014:162）。

だがこの問題は、地元住民との問題で終わらなかった。胡の意に反して[8] 夕刊紙が「池袋中華街構想バトル」「地元商店会 VS 中国系飲食店　池袋中華の乱」（『夕刊フジ』2008.2.6 夕刊）というセンセーショナルな報道を行った。

構想を提起した 2007 年は、タイミングの悪いことに日本と中国の外交問題にも発展した「中国製冷凍餃子中毒事件」が起きた時期であった。この夕刊紙は、あたかも中華街構

想が日中の政治対立の１つであるような扱いで報道した。

そのことは表１を見てもらうと分かりやすい。「東京中華街構想」が報じられた前後の時期は、同夕刊紙の１面に多くの冷凍餃子事件に関する見出しが躍っていた。ここで使用された文言は、「殺人」や「毒」「テロ」といった攻撃的で中国からの恐怖を感じさせるような報道であったことが確認できる。こうした、中国への敵愾心を煽るような文脈の中に中華街構想は位置づけられたのである。実際に「東京中華街構想」が報じられた 2008 年 2 月 6 日の記事内でも、「餃子事件」と関連させ地元商店会とのトラブルが強調されている。

表1　餃子事件と中華街構想の『夕刊フジ』の１面見出し

年次	１面見出し
2008.02.01	〝殺人餃子〟被害拡大スーパー、撤去作業加速
2008.02.02	〝殺人餃子〟袋に穴意図的混入か「低賃金や重労働への不満抱き」
2008.02.03	〝殺人餃子〟北京五輪重大危機
2008.02.05	ゆでダコ・枝豆・緑茶・落花生‥中国産物毒物リスト
2008.02.06	池袋中華街構想バトル
2008.02.07	毒餃子無差別テロの恐怖「模倣犯など続発」可能性大
2008.02.08	毒餃子中国従業員ら聴取
2008.02.10	ネット世界も中国毒襲来サイト「百度」モロ見え画像放置

出典）『夕刊フジ』の 2008 年 2 月 1 日～10 日までの 1 面見出しから作成。
注）冷凍餃子事件が起き、始めて 1 面の見出しになったのが 1 日からである。その間、9 日以外（4 日は休刊）は常に、この事件に関する見出しが 1 面に掲載されていた。

> 毒ギョーザ騒動に全国の中華料理店が戦々恐々だが、200 店以上がひしめく東京・池袋で密かに進められていた「東京中華街（トーキョー・チャイナタウン）」構想が、ちょっとした暗礁に乗り上げている。（中略）地元商店会は「伝統ある池袋を中華一色にさせられてはたまらない」と猛反発。構想が〝抗争〟にならなければいいのだけれど……。
>
> （『夕刊フジ』2008.2.6 夕刊）

これをきっかけにして池袋チャイナタウンは、排外主義勢力の標的となる。構想阻止を名目として排外主義的なデモ／街宣が行われたのである（山下 2016b:47-48）。また、右派系の雑誌でも池袋チャイナタウンに対する排外主義的な言論が見られるようになる。

例えば 2010 年には、雑誌『新潮 45』12 月号の特集「問題は尖閣諸島だけではない 中国に狙われる国境の島々」の中では、保守系の言論人である宮崎正弘が「池袋が中国人に乗っ取られる」という文章を寄稿している。2011 年に右派系の言論誌『ジャパニズム』では、「新大久保 VS 西池袋『チャイナ』都の西北で勃発した『新異国街戦争』」（田村 2011）といった煽情的なタイトルが躍った。

２── 安全保障の対象としての「新華僑」

（1）「中国」と「反日」の結びつき

本節では、池袋チャイナタウンに住む新華僑を排外主義勢力がどのような認識の下で排斥の標的としているのかを素描していく。

先行研究にて樋口（2014）は、「日本型排外主義」の特徴として、東アジアの隣国との関

係が悪化する中で、定住する（主に朝鮮半島や中国系の）外国人が「国内で危険を生み出すもの」(樋口 2014:169) として位置付けられると指摘した。そこでは「反日」が当該民族の「本質」として認識されることで「敵性外国人」とみなされ排斥の対象とされる。

樋口が論じるように「反日」という言葉は、日本において排外主義（またはレイシズム）発生装置として機能している。本稿の事例でも樋口の分析は重要な示唆を与える。

「池袋中華街構想」が提起された 2000 年代中盤の時期は、日中関係は悪化の一途にあった。この時期に表れたのが「中国」＝「反日国家」という捉え方である。

中華街構想が提起される 2 年前の 2005 年には、中国で日貨ボイコットや日系企業が襲撃される大規模な「反日デモ」が行われた（毛利 2010:186)。そして 2008 年 3 月には、チベットでチベット族と中国当局が衝突した。その影響から 2008 年に開催された北京オリンピックの長野聖火リレーでは、在日中国人と日本人とが衝突する。その後は、餃子事件といった様々なトラブルが相次いだ（山下 2016a:243)。元から中国を敵視していた排外主義勢力にとっては、中華街構想を日中関係の「抗争」問題として認識しやすい時期であった。

表 2 は筆者が作成した「中国」と「反日」がタイトルに使われた書籍のリストである。こうした書籍の登場は、主に 2000 年以降であり 2005 年の「反日デモ」以降から一気に増加している。それ以前は、1976、1987、1993 年に 1 冊ずつしかないことから、2000 年代以降に日中の政治的な溝が深くなる中で「中国」と「反日」がいかに結び付けられて語られたのかが分かる。

(2) 新華僑／老華僑を「分断」する「反日教育」

では、実際に排外主義の対象とされる新華僑と「反日」はどのような関係にあるのか。この「反日」という排外主義発生装置は、中国の改革開放政策以降に渡日した新華僑とそれ以前から定住する老華僑を分断する機能をもつ。そうした分断の下で、排外主義勢力は「反日」的な新華僑＝「敵性外国人」として認識する。

この際に言及されるのが中国政府による「反日教育」の影響である。

> 一般的に「中国人が増えることの何が悪いのか」という意見もあるのではないか。
>
> これが親日的な国からやって来る人々なら然したる問題はないのかも知れないが、共産主義独裁国家という日本とは明らかに異なる政治体制、価値観の国からやって来る者らだけに厄介なのだ。
>
> 支那・中国政府が強烈な反日教育を施していることも視野に入れねばならない。
>
> （中略）
>
> 日本が日本でなくなり支那・中国と化す状況でも、なおも中国人を歓待出来るか？
>
> （有門 2008a）

いわゆる「老華僑」と呼ばれ、戦前に中華民国から来日し、日本で商売を続けて来た者と異なり、現在の新華僑とも呼ばれる者は、中国共産党の反日教育を受けてきた世代である。商売のやり方も、日本人客などほとんど眼中に無く、同胞に対する商売を専らとする。いわば、日本に侵蝕し、かつての「租界」(支那全土に列強国がつくった、治外法権や行政権がある外国人居留地）を作ろうとしているようなものである。

（金友 2011a）

上記の引用は、池袋の中華街構想に対する排外デモの参加者のものである。これを要約すると「中国人」（新華僑）は、中国政府による「反日教育」を受けているから日本を「侵略」しようとするという物語としてまとめられよう。

こうした中国政府による「反日教育」の影響は、右派言論内では数多く語られてきた。1つの例として、右派論壇誌などで強く中国批判を展開する黄文雄の『反日教育を煽る中国の大罪』（2005）による説明を見てみる。

日本のメディアは「反日」と説明したが、それはむしろ「反日」の域を超えた「仇日（きゅうにち）」と呼ぶほうが適当だろう。

（中略）

近年の中国人の仇日行動が、主に青少年に限られていることに注目すべきである。

過去の戦争をまったく知らない彼らが日本に向けて発する罵詈雑言たるや、極めて攻撃的であるのはなぜかといえば、それは江沢民（こうたくみん）時代の仇日教育の影響を受けているからだ。

（黄 2005:1-2）

右派言説では、中国政府の「反日教育」は文化大革命以降に混乱した中国をまとめ上げるため、1989年に発足した江沢民政権によって行われたと主張される[9)]。このような認識が無批判に排外主義的な市民運動側にも伝染していったと考えられる。

以前から日本に住む老華僑と違い、80年代後半に渡日してきた新華僑を日本に「脅威」をもたらす存在として規定するのが「反日」である。排外主義勢力にとって新華僑は、「反日国家」による「反日教育」を受けていることで、「反日」が本質化した国民／民族として認識されている。以上の認識によって、新華僑と老華僑の「分断」が図られているのである。

3――2つの「チャイナタウン」―横浜と池袋

（1）象徴としての横浜中華街

池袋で生活をする新華僑が排外主義の標的とされた要因は、「反日教育」によって、「反日」が本質化した国民／民族として認識されたことであった。

表2　「中国」&「反日」本リスト

出版年	タイトル	著者／編者	出版社
2003	中国「反日」の狂奔	黄文雄	光文社
	中国はなぜ「反日」になったか	清水美和	文藝春秋
2004	「反日」構造：中国、韓国、北朝鮮を煽っているのは誰か	西村幸祐	PHP研究所
	「反日」に狂う中国「友好」とおもねる日本：親日派中国人による苛立ちの日本叱咤論	金文学	祥伝社
	「反日」で生きのびる中国：江沢民の戦争	鳥居民	草思社
	中国こそ逆に日本に謝罪すべき9つの理由：誰も言わない「反日」利権の真相	黄文雄	青春出版社
2005	歴史認識をめぐる日本のパブリック・ディプロマシー ：最近の中国における反日暴動に関連して	清井美紀恵	世界平和研究所
	ほんとうは日本に憧れる中国人：「反日感情」の深層分析	王敏	PHP研究所
	反日教育を煽る中国の大罪：日本よ、これだけは中国に謝罪させよ!	黄文雄	日本文芸社
	「反日」解剖：歪んだ中国の「愛国」	水谷尚子	文藝春秋
	汝の敵、中国を知れ：知られざる反日国家の顔	竹下義朗	雷韻出版
	徹底検証!中国・韓国の歴史教科書：彼らは、なぜ反日運動に生命をかけるのか?	イースト・プレス 特別取材班 編	イースト・プレス
	中国「反日」の末路	長谷川慶太郎	東洋経済新報社
	中国「反日」の虚妄	古森義久	PHP研究所
	中国・韓国反日歴史教育の暴走	黄文雄	海竜社
	中国よ、「反日」ありがとう!：これで日本も普通の国になれる	宮崎正弘	清流出版
	中国反日運動の背景：内外著名人の論説より考察する	内田辰之	冬至書房
	中国の瀬戸際戦略：「反日」の裏に隠された「反米」を読み解く	松村劭	芙蓉書房出版
	中国農民の反乱：隠された反日の温床	清水美和	講談社
	現代中国の禁書：民主、性、反日	鈴木孝昌	講談社
	アンチヤマトイズムを止めよ!：中国に付和雷同するフランスの反日メディアに抗議	竹本忠雄	日本政策研究センター
	朝日新聞が中国を驕らせる：反日、反米の呪いと親中媚態言論の正体	山際澄夫	日新報道
2006	「反日」の超克：中国、韓国、北朝鮮とどう対峙するか	西村幸祐	PHP研究所
	「反日」とは何か：中国人活動家は語る	熊谷伸一郎	中央公論新社
	「反日」以前：中国対日工作者たちの回想	水谷尚子	文藝春秋
	中国が「反日」を捨てる日	清水美和	講談社
	中国人による中国人大批判：日本は謝罪してはならない	金文学	祥伝社
2007	中国「反日」の虚妄	古森義久	文藝春秋
2009	中国の「反日」は終わらない	黄文雄	徳間書店
	反日、暴動、バブル：新聞・テレビが報じない中国	麻生晴一郎	光文社
	近代中国東北教育の研究：間島における朝鮮人中等教育と反日運動	許寿童	明石書店
2010	悪魔の輪廻：なぜ中国で反日運動は頻発するのか	周希寧	ダイナミックセラーズ出版
2011	反日：中国は民族主義を越えられるか	馬立誠	中央公論新社
	中国「反日」の源流	岡本隆司	講談社
	中国「反日」活動家の証言	王錦思	河出書房新社
2012	「反日」の正体：中国、韓国、北朝鮮とどう対峙するか	西村幸祐	文芸社
	「反日」の構造：中国、韓国、北朝鮮を煽っているのは誰か	西村幸祐	文芸社
	反日感情を操る中国の正体：日本よ、これだけは中国に謝罪させよ!	黄文雄	日本文芸社
	「中国の終わり」のはじまり：習近平政権、経済崩壊、反日の行方	黄文雄, 石平	徳間書店
	中国「反日デモ」の深層	福島香織	扶桑社
	中国と習近平に未来はあるか：反日デモの謎を解く	大川隆法	幸福実現党
	現代中国「国盗り物語」：かくして「反日」は続く	宮崎正弘	小学館
2013	反日デモで示された中国の野望：アジアの平和は日本の責任	伍大陸	豊浦義友
	「反日」で生きのびる中国	鳥居民	草思社
	「反日」中国の真実	加藤隆則	講談社
	なぜ中国人・韓国人は「反日」を叫ぶのか	黄文雄	宝島社
	中国人は日本が怖い!：「反日」の潜在意識	富坂聰	飛鳥新社
	中国人と韓国人が作った「インチキ神話」に操られる日本人! ：本当に恐ろしいのは「反日日本人」だ	黄文雄	ヒカルランド
	中国の「反日」で日本はよくなる	宮崎正弘	徳間書店
	これからの中国ビジネスがよくわかる本：中国専門トップ弁護士が教える チャイナリスクと対応策：反日デモ 賃金上昇 成長停滞	村尾龍雄	ダイヤモンド社
2014	華の髄より中国を覗く：「反日感情」見ると聞くとは大違い	黒古一夫	アーツアンドクラフツ
	反日日本人：韓国・中国だけが敵じゃない!	KAZUYA	青林堂
	「反日」中国の文明史	平野聡	筑摩書房
	日本人なら知っておきたい「反日中国」100のウソ.		宝島社
	日本を取り戻す：アベノミクスと反日の中国・韓国	黄文雄	光明思想社
	なぜ韓国人・中国人は「反日」を叫ぶのか	黄文雄	宝島社
	中国の「反日」で日本はよくなる	宮崎正弘	徳間書店
	中国人は「反日」なのか：中国在住日本人が見た市井の人びと	松本忠之	コモンズ
	極嫌・極悪ヤバすぎる!反日中国人韓国人101人の正体!!：永久保存版.		双葉社
2015	反日石碑テロとの闘い：「中国人・朝鮮人強制連行」のウソを暴く	的場光昭	展転社
	中国セックス文化大革命：反日事件と性の自由が爆発する時	邱海涛	徳間書店
	中国・韓国との新・歴史戦に勝つ!：反日同盟	ケント・ギルバート, 室谷克実, 石平	悟空出版
	それでもなぜ、反日大国の中国人、韓国人は日本に憧れるのか?	黄文雄	海竜社
	習近平の「反日」作戦：中国「機密文書」に記された危険な野望	相馬勝	小学館
	権力闘争がわかれば中国がわかる：反日も反腐敗も権力者の策謀	福島香織	さくら舎
	克中韓論：中国・韓国の「反日情報工作」に打ち克つ日本	黄文雄	イースト・プレス
2016	爆買いと反日：中国人の不可解な行動原理	柯隆	時事通信出版局
	中国韓国反日妄言総まとめ = China and Korea's Anti-Japanese Ravings 2015-2016		晋遊舎
2017	日中歴史戦 = JAPAN-CHINA HISTORY WAR ：中国が発信する反日プロパガンダとの戦い		宝島社

出典)「国立国会図書館サーチ」の「詳細検索」で、「データベース」を「国会図書館所蔵」、「資料種別」を「図書」に限定し、「タイトル」の検索を「中国」AND「反日」で検索。その中から、日本で出版され、タイトルに中国と反日が入っているものを抜粋して作成（最終閲覧日 2017 年 11 月 7 日）。

本節では、排外主義勢力が文化的差異の象徴として何を持ち出すのかについて見ていく。この象徴によって、前章で見たような新華僑を「脅威」として認識することに加え、老華僑を「同化」した存在として捉えることが可能になっている。

「東京中華街構想」阻止運動の参加者や池袋チャイナタウンを否定的に捉える論者は、池袋への新華僑の流入を中国による日本への「侵略」であると批判する。

> 支那の侵略が現実となった時、その時、我々は日本人は、どこに逃げればいいのか？（中略）海に囲まれ、同一の文明を共有する国を持たない日本人に、逃げ場は存在しないに等しい。日本列島は、閉ざされた逃げ場のない〝溜め池〟なのだ。
>
> （金友 2011c:35）

> 外から見て、中国料理屋がまばらにしかないと思っては池袋北口を見誤る。中国人の人口侵略はとっくに始まっているのだ。
>
> （水嶋 2014:193）

では、それに対して横浜中華街に対するイメージはどうか。

> そして彼らは「中華街構想」を口にするが、こうした実態が日本人に何をもたらすというのだろうか。「中華街」ならぬ「注禍街」の間違いだろう。少なくとも、神戸南京町や横浜中華街のように、日本人が安心して楽しむ事の出来る街ではないだろう。
>
> （金友 2011b）

> 最近は新宿や新大久保を追われた中国人らが職を求めて住み着いて自然発生的にできたという。横浜中華街のような歴史もないし、外面をよくしようと努力もしない。
>
> （水嶋 2014:192）

以上のように排外主義勢力は、池袋チャイナタウンを否定し横浜中華街には好意的な態度を見せる。それは、以下の引用にもあるように排外主義勢力にとって「脅威」としての新華僑と「同化」した老華僑の象徴として機能している。次節では、こうした象徴として持ち出される理由を池袋チャイナタウンと横浜中華街の比較から明らかにしていく。

> 結論から述べると池袋チャイナタウンなどつくるべきではない。
>
> それは単に治安が悪くなるだとか文化的な摩擦が起きるといった問題にとどまらず、日本とシナにおける国と国の関わり合いにも密接に繋がっている。
>
> まず、同じくシナ・中国との文化的交流の街として知られる『横浜中華街』と『神戸南京町』はともに約 140 年の歴史を持ち、『長崎新地中華街』も江戸時代にまで遡るほ

ど古くから交流を重ねてきた。

この間、日本は江戸時代の鎖国下を経て、日清戦争や日中戦争を通じて今日までの歴史を持つものであり、いずれも藩なり国または県の主導下で交流が活性化し、また在日華僑が同化してきた歴史があるのだと思う。

（中略）

そうした歴史的経緯のある街と、昨今、東シナ海をはじめアジア周辺に覇を唱えて軍事的脅威を増すシナ中共を見るに、新たに首都につくられようとしているチャイナタウンを同列に考えてはならない。

池袋におけるチャイナタウン構想は、シナ・中国共産党の命を受けたものであることは疑う余地がなく、日本で工作活動をするための拠点づくりと考えるのが当然だろう。

（中略）

これが今の日中関係で、「対中屈服」「対中隷属」とも言えるシナ中国との関係の下で、池袋につくられようとしているチャイナタウンはかつてとはまったく趣きの異なる街となるだろう。（有門 2008b）

（2）横浜中華街の形成過程

横浜中華街が形成されたのは、1870 年代後半頃であった。横浜に中国（当時は清国であり、正式には清国人であるが以下では「中国」と表記する）から多くの人が進出してくるようになったきっかけは、1858 年に調印された日米修好通商条約であった。この条約のもとに箱根や新潟、神戸、長崎、そして横浜（1859 年 7 月 1 日）に開港場が開設された。開港と同時に、中国出身者が来浜する。単身で来日した人もいたが、その多くは、欧米商人に伴われてきたと言われている。日本と古くからの歴史的な関係を持っていることや漢字という共通の意思疎通手段を持っていたことから、欧米商人から仲介者としての役割を期待されていたのである（横浜開港資料館編 1994:10-11）。

それから 12 年後の 1871 年に、日本と当時の清国との間に日清修好条規が結ばれる。これにより日本に住む華僑も正式に条約国民となった。その結果、外国人居留地以外の場所にも住むことが許されるようになる。だが横浜在住の中国出身者約 1000 人のうち、半分はそのまま居留地に残ることとなった。その場所が現在の横浜中華街である（譚 2008:118）。

そして 1899 年の「内地雑居令」の発布により、日本人の働く場が侵害されないことを理由に、特殊技能を持つ者に限って中国出身者による営業の自由が認められた。この許可を受けた職種が料理、洋服仕立、理髪、行商、貿易などであった（菅原 1988:103-104）。

このような流れのなか、中華街が少しずつ形成されていった。しかし、関東大震災や戦時中の空襲などにより横浜も大打撃を受ける。日本の敗戦後横浜は、闇市の拠点となる。横浜に駐屯していた GHQ 占領軍の兵士たちによって、遊ぶ金欲しさに不要になった飲食料や医薬品など、当時の日本で手に入りづらかった物が持ち込まれた。また、華僑には

「戦勝国民」として特別配給物資がGHQから渡された。そこで得た米や砂糖なども闇市で売られるようになり多くの日本人も中華街に殺到した（菅原 1988:105; 譚 2008:130）。

横浜中華街が現在のような一大観光地となるのは、長友麻苗未（2009）によれば1970年代の大阪万博や日中国交回復が契機であった。日本人来訪者の増加に伴って、横浜中華街を代表する「牌楼」が作られるなど観光地化が進んでいった。80年代には、グルメブームが起こり中華街を取り巻く環境が好転する。2000年代に入ると地下鉄も開通し、その発展基盤が年々整備されることで現在のような姿になった。

（3）異なる空間、異なる対象

池袋と横浜のチャイナタウンを比較する上で重要なのは、「誰」にとっての場所かということである。

横浜中華街の歴史は古く、その形成に携わってきたのは老華僑が中心である。その横浜中華街がビジネスの対象としてきたのは、「日本人」であった。横浜中華街「街づくり」団体連合協議会会長の林兼正は、横浜中華街がいかに「日本人」のための場所なのを強調する。

> 特徴としてもう一つ。（横浜）中華街は、最も中国人が少ないチャイナタウンです。
>
> （中略）
>
> この街はチャイニーズのためのチャイナタウンではなく、日本人のための街なのです。お客さんの九十八％は、日本人です。したがって、マーケティングをして、お客さんのニーズに合わせた料理やサービスを提供するとなると、日本人のスタンダードに合わせる必要があります。
>
> （中略）
>
> そして昔から住んでいる華僑は、私のように日本人に同化します。華僑が同化することによって、中華街そのものが、完全に日本化してきた。
>
> （林 2012:179）（（横浜）は筆者による補足）

それに対して池袋チャイナタウンはどうか。山下が「新華僑のビジネスの特色は，同胞である新華僑を対象にしたものがほとんどである。日本三大中華街が主として日本人観光客相手に成り立っているのに対して，池袋チャイナタウンの店舗の顧客は，中国料理店を除いて，もっぱら新華僑同胞である。」（山下 2016a:241）と述べているように、池袋におけるビジネスの対象はあくまでも同胞華人である[10]。

こうした対象の違いは街の外観にも表れている。「おもてからこの界隈をながめているだけでは、決して『チャイナタウン』を実感することはできない。」（野村 2011:236）といわれるように池袋には横浜中華街のような赤や緑、金といった色彩は一切見られない。中華街の象徴である牌楼もない。実際に池袋西口／北口周辺を歩くと、池袋チャイナタウンの玄関口と呼ばれる中国の食品スーパー「陽光城」に多少の中国的な装飾が見られる以外は、

ほとんど中華街らしい雰囲気はない。周りもビルやマンションの窓ガラスに中国語の看板やビラが貼られている程度である。むしろ、ラブホテルや性風俗店が隣接していることから歓楽街といった印象の方が強い。

このように日本最大級のチャイナタウンである横浜中華街は、、エスニックタウンである以上に「中国」を彩った観光地であり「日本人」にとっては巨大な消費空間なのである。それに対して池袋チャイナタウンは、同胞華人に向けた店舗や施設が集中する場所であり「日本人」は「外部」の存在となる。排外主義勢力が「同化」を象徴するものとして横浜中華街を用いるのには、この 2 つのチャイナタウンが向いている対象の違いにあるのではないか。

4――通底する「植民地的まなざし」

本節では、ここまで確認してきた問題を整理しつつ排外主義勢力が向ける「植民地的まなざし」の問題を指摘したい。

池袋のエスニック状況について奥田は、「新宿は韓国系、池袋は中国系、台湾が比較的多数であるものの、そこに独自のシステムをもつコリアン・タウン、チャイニーズ・タウンが形成されるかというと、疑問である。」（奥田／鈴木編 2001:3）と述べており池袋がエスニックタウンとして顕在化するとは考えていなかった。

この指摘が 2001 年であったことを考えれば 6 年後に「東京中華街構想」が立ち上げられたのはかなり早い展開だったといえる。そうした状況では、池袋の地元の商店会にとって急な話として感じられても不思議ではない。

また地元住民と新華僑の関係は薄く、ゴミ出しなどのトラブルも相次いでいた（山下 2016a:242）。他にも地元商店会が反対した理由として、池袋の都市としてのありようの問題も関係していたのではないか。池袋は、決して良いイメージの場所ではなかった。戦後の闇市や東京拘置所（旧巣鴨プリズン）といった負のイメージが付きまとっていた。そしてバブルが崩壊しインナーシティとなった 90 年代の池袋は、ヤンキー文化や援助交際、風俗、ヤクザといったアンダーグラウンドな場所として認知された。特に西口には、いわゆる「ブクロ」なイメージがメディアの影響も手伝い「暗い・怖い・犯罪といった批判」（伊藤 2015:219）がなされていた。

そのため豊島区や池袋に住む人びとにとっては、このイメージを一掃し綺麗な文化的な池袋のイメージに作り変えることが重要な命題であった。中華街構想が提起された時期は、「池袋とは何か」という都市アイデンティティが問い直されていた時期でもあった。そのため商店会側から「街を勝手にかきまわすようなことはしないで」（『朝日新聞』2009.5.8 朝刊）といった反応が表れるのは無理もないことであったといえる。

奥田（1996）は、ホスト地域がニューカマーズとしての外国人を受け入れていく過程は 2 段階あると指摘していた。1 段階目が「仮の受容」段階である。これはホスト地域社会側

と流入してくるがニューカマーとの間で、ホスト側が「過剰反応」を見せることなく受容していく段階である。そして2段階目が、「本当の受容」段階と呼んでいるものである。それは、ホスト社会とゲスト側との間で利害の不一致による葛藤や紛争が起きたときに、個別に責任を押し付けたり、排斥行動に移ることのなく「問題を共有するなかで、日本人側にも生き方の覚悟（Affrmation of life)、人生の肯定とも言うべき認識が生まれている。(中略)このような生き方の覚悟という価値にかかわる文化変容（アカルチュレーション)」(奥田1996:133）が起きる段階が「本当の受容」段階である。

奥田によれば池袋は、「仮の受容」段階から「本当の受容」段階にさしかかっている途中だという。続けてそこには1つの関門として、文化変容が問われる中で改めて「日本人」と「外国人」との境を問題化するような反作用が生まれると指摘する。

> それは、あいまいな、厚みのある現実を前にして、改めて「日本の地域社会とはなにか」「日本人とはなにか」また「外国人とはなにか」を、正面から問われることにある。「日本人」と「外国人」との線引きは、「日本人」と「外国人」とが相互に入り組み、浸透し合う関係が、予想以上のテンポと幅で進捗するとき、受け入れ地域社会側で一種のリアクション（反作用）としてこのような問いが発せられることがある。
>
> (奥田 1996:134)

「日本」という単位ではないが、「池袋とは何か」が問われていた中で起きた「東京中華街構想」の提起と商店会からの反応は、まさしくこの関門であり、1つのリアクション（反作用）であったといえるのではないか。

では、中華街構想をきっかけにして起きた排外主義も同じくリアクション（反作用）なのかといえばそれは違う。「東京中華街構想」における商店会と新華僑社会側とのトラブルはあくまでも地元住民、または地元商店同士の問題であり直接的な利害関係の中で起こっていた。だが、排外的なデモを行った運動参加者や池袋チャイナタウンを否定的に論じた識者は地元の人間ではない。中国との政治的な関係を持ち込んでくる排外主義は、当該地域と特に関係のない外部の人間によるものである。

そもそも「『日本人』と『外国人』とが相互に入り組み、浸透し合う関係が、予想以上のテンポと幅で進捗するとき、受け入れ地域社会側で一種のリアクション（反作用)」を生むという奥田の指摘は、ホスト地域が（積極的に)「外国人」を受け入れていたということが前提となった上での「リアクション（反作用)」である。

排外主義勢力にとって「中国人」(新華僑）は、2節で明らかにしたように「反日」的な「敵国人」であり元来受け入れるつもりはない。むしろ排斥行動を商店会とのトラブルと同様と分析することは、どちらも悪いという結論を招きかねない。

では、池袋チャイナタウンを標的とした排外主義をどのように捉える必要があるのか。谷富夫（2015）は、民族関係を個人レベルの「パーソナルな民族関係」、集団レベルの民族

関係を「構造的な民族関係」の２つに分ける。個人レベルであれば民族関係の成立は容易であるが集団レベルにおいては、仮にその集団の統合原理が同質的／排他的であれば、その集団の行動規制が働き対立や葛藤が生じると指摘する。また後者の「構造的な民族関係」においては、権力関係が制度化されていることが多くそれを「マジョリティ―マイノリティ関係」と呼んでいる。その上でマジョリティ側が自己の民族性を顕在化し他民族と対立や葛藤をしている場合には、排外主義などの排斥運動が起きると分析する。

「東京中華街構想」が登場した時期は、日中関係が悪化し排外主義勢力は中国を「反日国家」として強く敵対視していた。それは、谷の言葉を借りれば「マジョリティ側が自己の民族性を顕在化し他民族と対立や葛藤」していた時期であった。中華街構想が排外主義勢力の琴線に触れたのは、この「日本人」としての民族性を強く「顕在化」していたことに要因がある。

ではここで「顕在化」した「民族性」とはいかなるものか。ここでヒントになるのが、新華僑と老華僑の文化的差異の象徴として用いられた２つのチャイナタウンへのまなざしではないだろうか。

横浜中華街と池袋チャイナタウンの最大の違いは、その「対象」にあった。ここで興味深いのが長年横浜中華街を研究する菅原一孝の指摘である。

> 空間のあり方をみたとき、中華街のそれは東京ディズニーランドに似ている部分があるように思える。
>
> （中略）
>
> ディズニーランドでは、歩行者に心地よいリズム感を与えるように、変化に富んだメルヘン的な建物があちこちに配置され、大人にも夢を与えるように仕掛けられている。中華街の場合もそれに似ている。建物のスタイルにしても店舗のディスプレイや看板にしても、中国の古典にヒントを求めた童話的なものが、広い空間のあちこちに散らばっている。歩行者は視覚で楽しみながら街を散策することができる。
>
> （菅原 1988:208-210）

菅原が述べる横浜中華街とディズニーランドとの共通性は重要なポイントではないか。この点を分析する上で示唆に富むのが、70 年代以降の日本社会の言説／空間構成を「日本社会のディズニーランド化」（吉見 1992:120）と分析した吉見俊哉の議論である。

吉見（1992）によれば「日本社会のディズニーランド化」とは、日常的現実がメディアによって提示される平面的な世界の拡張として経験されるものである。ディズニーランドやディズニー映画の特徴として、本来人間社会の〈外部〉であるはずの自然や動物たちをキャラクター化して「かわいらしい」存在として飼いならし「他者」を「植民地化」していく言説的な機制が偏在化してきているという。

こうした吉見の分析は、池袋チャイナタウンと横浜中華街へ排外主義勢力が向けるまな

ざしを理解する上で一定の有効性をもつのではないか。菅原の引用にあるように横浜中華街は、1972 年の日中国交回復による中国ブームや 80 年代のグルメブームのなかで「中国」的な記号を散りばめることで作られた記号的な消費空間である。そこでは、かつて関東大震災で多くの老華僑が殺された事実などの歴史は忘却され、あくまでも「メディアによって提示される平面的」な観光地としての「中国」が消費の対象とされる。

吉見が「アドベンチャーランドの動物は、『本当の』アフリカの猛獣に似ている必要はなく、むしろ大衆好みの探検小説に出てくる動物を立体化していればよい。」（吉見 1992:117）と述べたように横浜中華街では、「日本人」が食べたい「中華料理」が再現され「日本人」が思う「中国」的な色彩に彩られる。つまり横浜中華街とは、吉見が「日本社会における全域的な植民地化の機制を、われわれは『愛玩化 Cutification』と呼」（吉見 1992:120）んでいるのと同様に「日本人」が求める「日本人」のための「愛玩化 Cutification」された「中国」と考えられるのではないか。そこにあるのは、「日本人」から向けられる「植民地的なまなざし」である。

では、池袋チャイナタウンはどうか。ここには「愛玩化 Cutification」された「中国」は存在しない。新華僑同胞を対象にしている池袋では、逆に「日本人」が外部の「他者」となり、「日本人」の優越性はない。だからこそ、排外主義勢力にとっては「可愛くない」のである。

ここに見られるのは「日本人」の（勝手な）都合で可愛いい／可愛くないを決める「植民地的まなざし」ではないか。

紙幅の都合上、これ以上の考察は行えないが日本で跋扈する排外主義の対象は、沖縄や（制度上いないことになっている）移民や難民などその対象は拡散している。そこに通底しているのは、このような「植民地的まなざし」ではないか。「日本人」が管理者として「他者」を自分たちのコントロール下に置きたいという欲望であり、そこから逃れようとする「他者」は一方的に攻撃される。こうした欲望が刺激されるような情報が流布されれば、その対象は容易に拡散していくのである。

それはまた、かつてテッサ・モーリス＝スズキが、日本の多文化主義の態度を文化の多様性をもてはやしつつ、あくまでも厳格な条件にかなう限り認めるという「コスメティック・マルチカルチュラリズム（うわべの多文化主義）」と表現した問題とも共鳴している。

池袋チャイナタウンが排外主義に狙われたプロセスは、こうした現在起きている排外主義の拡散、そして日本における多文化主義を考える上でも非常に示唆的な事例ではないだろうか。

――結びにかえて

本稿では、日本における排外主義勢力が、どのように排外主義を「正当化」してきたかを池袋で中国ルーツの人びとを標的とした排外主義勢力の言説を事例に考察を行ってき

た。そこで現れた言説は、新華僑を「脅威」、老華僑を「同化」した存在であると認識することで、「同化主義」による排外主義の「正当化」がおこなわれていた。まず1節で見たように池袋チャイナタウンが標的となった理由は、周辺の中国系の店舗が提起した「東京中華街構想」がきっかけであった。さらに2節では、「反日教育」による「反日」的な国民／民族であると規定されることによって、新華僑と老華僑の「分断」が図られていた。そして3節では、2つのチャイナタウンの文化的な差異にも、それが表象されていることを明らかにした。最後にその根底には、「日本人」にとって都合の良い「外国人」とそうでない「外国人」を分け、他者を自分たちの管理下に置きたいという「植民地的まなざし」があるという仮説を提示した。

本稿の分析から中国に関連した排外主義として、以上のような言説戦略が見られた。もちろんこれ以外にも中国を対象とした排外的な言説は数多くあるが、ここではその一端を明らかにできたのではないかと思う。またこのような、ニューカマーである新華僑とオールドカマーの老華僑の区別や、その文化的差異の象徴としてエスニックタウンに言及するといった言説は、在日コリアンを含む韓国／朝鮮を標的とした排外主義には見られない特徴である。これらは、先行研究では言及されてこなかったことでもある。

最後に論じた「植民地的まなざし」については、まだ十分な考察とはいえず、あくまでも仮説に留まる。さらなる分析は今後の課題として筆を置きたい。

《注》

1）山下は、「池袋チャイナタウン」の名称を初めて使用したのは、自分であると述べている（山下 2016a:239, 2016b:44）が、実際には、1992年11月24日の雑誌『AERA』にて、「池袋チャイナタウン」という名称は使用されている（梶原 1992）。そのため本稿では、山下を「池袋チャイナタウン」の名称を社会一般に流通させた論者として位置づける。

2）池袋チャイナタウンが紹介されている本／雑誌媒体として、東京のエスニックタウンを特集している、ブルーガイド編集部編『おさんぽマップ 東京エスニックタウン』（2013）やジャーナリストの河畑悠によるルポ『東京のディープなアジア人街』(2014）などがある。また2013年に出版された池袋だけを掘り下げた『池袋本』の中でも池袋チャイナタウンが観光スポットとして取り上げられている。

3）これまでの研究にて、在日コリアンや韓国関係が中心だったのは、その被害の甚大さにある。藤巻（2015）の調査でも在日コリアン／韓国人と在日華僑では、明らかに在日コリアンの方が排外主義の標的になった際の被害が大きい。本稿で新華僑に対する排外主義を対象とするのは、こうした違いがどういった構造から生まれているのかを把握するためでもある。

4）在日コリアン及び韓国／朝鮮に関する排外主義の場合は、このようなオールドカマーとニューカマーを明確に分け、それに言及することはほとんどない。排外主義勢力が在日コリアンや韓国／朝鮮を対象にデモ／街宣を行う場所として、新宿の新大久保や神奈川県の川崎が挙げられる。川崎は古くから在日コリアンの集住地域（山田 2017）であり、新大久保はニューカマー中心の2002年日韓W杯や韓流ブームに乗って形成されてきた消費の場としての「コリアンタウン」である（稲葉 2008)。筆者がデモ／街宣を観察する限り、そうした差異に言及されることもない。そもそも排外主義勢力のスピーチでは、同じデモ／街宣内で「在日」や「韓国人」「朝鮮人」といった言葉が飛び交

い一貫性はなく、また川崎と新大久保といった場所の違いが言動の中に表れることも筆者が見聞する中では見られない。

5）現在池袋がある豊島区の中国籍者の人口は、東京都の人口統計（各年１月）によれば 1980 年代当初は約 1000 人程であったが、1989 年に 9000 人を超える。その後も豊島区では一貫して外国籍者の最大人口であり、2017 年１月時点で 11,948 人となっている。現在、ネパールやベトナムなどのアジア系の人びとが増加しているが、それでも外国籍者数全体の 45%以上を占め、豊島区全体の人口比率でも１割近くにのぼっている。

6）これは、戦後東京の居住様式の特徴である「山の手住宅地」のなかで、新宿区や豊島区など、戦前に市街化された都心近接の副都心インナー・城西で、「木賃アパートベルト地帯」が形成された。山の手側に木賃アパートがベルト状に建設された理由は、戦前東京の住宅供給の特色であった借家が、戦後は持ち家化したことで、一戸建持家が増加したからである。その時に、下町側では借地持ち家が中心であるのに対して、山の手側は所有地持ち家が中心であったため自宅の建て替え資金や生活防衛のため庭先に建設したためであった（和田 2006:133）。

7）「東京中華街構想」が池袋中華街という名称にならなかったのは、横浜には中華街があるが、東京にはないからという理由からである（山下 2016b:44）。

8）胡はインタビューで、当時自分がサラリーマンだったこともあり、日本のメディアからの取材を断っていたものの、強引に取材が行われたあげく、曲解された記事にされたことを述べている。「冷凍餃子事件もあった頃だったので、結び付けられるのも困ったし。ずっと逃げていたけど、会ってくれなかったら勝手に書くぞ、なんて言われて、じゃあ、僕の言うことを全部書いてください、という条件で会った。でも、結局、『東京中華街 VS 地元商店街』という見出しで、僕たちが地元商店街と対立しているように書かれてしまった。確かに私が話したことを書いているけど、記事の構成がおかしい。」（鈴木 2014:161-162）。

9）筆者自身は中国の専門家ではないため、現在この「反日教育」について詳細に検討する能力はない。中国政治を専門とする毛利和子は、「この愛国キャンペーン自体は、現在の日本に対する反対運動ではない。（中略）学校教育で日中戦争の『悲劇』を視覚から教え込まれる青少年の対日認識は、当然一定のベクトルをもつことになるし、彼らの日本についての知識はしばしば日中戦争での『日本軍』だけになってしまう。二〇〇五年の『反日デモ』が、こうした中で育った若者によってあったという間に広がったという面は否定できない。」と述べる。こうした毛利の指摘を踏まえれば、単純に「反日」という安易な括りで理解することはできないだろう。問題にするべきは、自分たちが気に入らなくなったら、他国やその国民／民族を「反日」かどうかで測ろうとする日本側ではないか。

10）注３で述べたように、在日コリアン／韓国人と比較すると、池袋の新華僑の方が被害は少ない。その１つの理由は、池袋では、新大久保ほどの大きなデモが起こらなかったことである。もう１つの要因に、顧客対象の違いがある。新大久保の場合は、ビジネスの対象が「日本人」を基本としているが、池袋の新華僑は基本的に華僑同胞である。そのため、日中間の政治的な問題が起きても、さほどビジネスや生活に影響が表れていない（藤巻 2015:204-205）。

《文献／資料》

有門大輔, 2008a,「支那・中国人ダントツ１位の脅威!」, 侍蟻 -SamuraiAri- 勤皇志士による国民的 BLOG, 2008 年６月３日,（2017 年 11 月９日取得 http://blog.livedoor.jp/samuraiari/archives/2008-06-03.html）.

――――, 2008b「池袋を共産中国の『対日拠点』にするな!」, 侍蟻 -SamuraiAri- 勤皇志士による国民的 BLOG, 2008 年９月８日,
（2017 年 11 月９日取得 http://blog.livedoor.jp/samuraiari/archives/51206287.html）.

ブルーガイド編集部編, 2013,『おさんぽマップ 東京エスニックタウン』実業之日本社.

エイ出版社編集部, 2013, 『池袋本』エイ出版社.
藤巻秀樹, 2015, 「日韓・日中関係悪化と在日韓国・中国人」移民政策学会編『移民政策研究』明石書店, 7:199-210.
林兼正, 2012, 「横浜中華街物語」横浜商科大学編『横浜商科大学中華街まちなかキャンパス横浜中華街の世界【増補版】』学校法人横浜商科大学, 176-197.
樋口直人, 2014, 『日本型排外主義 在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.
石田衣良, 2014, 『憎悪のパレード 池袋ウエストゲートパークⅪ』文藝春秋.
伊藤一雄, 2015, 『池袋西口戦後の匂い』合同フォレスト.
稲葉佳子, 2008,『オオクボ 都市の力 多文化空間のダイナミズム』学芸出版社.
梶原葉月, 1992, 「池袋チャイナタウン マレー人も合流、天皇訪中に『百花争鳴』」『AERA』朝日新聞社, 5(48):62-63.
金友隆幸 2011a, 「池袋『チャイナタウン』を行く 前編」, 新攘夷運動 排害社ブログ「排害主義者宣言」, 2011 年 1 月 19 日, （2017 年 11 月 9 日取得 http://haigai.exblog.jp/12721845/）.
————, 2011b, 「これが迷惑支那人の実態だ!」, 新攘夷運動 排害社ブログ「排害主義者宣言」, 2011 年 3 月 7 日, （2017 年 11 月 9 日取得 http://haigai.exblog.jp/13071467/）.
————, 2011c, 『排害主義者宣言　支那人の日本侵略』日新報道.
河合優子, 2016, 「日常的実践としてのナショナリズムと人種主義の交差」河合優子編『交差する多文化社会 異文化コミュニケーションを捉え直す』ナカニシヤ出版, 119-148.
河畑悠, 2014, 『東京のディープなアジア人街』彩図社.
金秀明, 2015, 「日本における排外主義の規定要因 社会意識論のフレームを用いて」関西社会学会編『フォーラム現代社会学』14:36-53.
清原悠, 2015, 「歴史修正主義の台頭と排外主義の連接 読売新聞における『歴史認識』言説の検討」山崎望編『奇妙なナショナリズムの時代 排外主義に抗して』岩波書店, 69-112.
黄文雄, 2005, 『反日教育を煽る中国の大罪』日本文芸社.
長友麻苗未, 2009, 「横浜中華街の発展とブランド(ママ)イメージ」『学芸地理』, 64:70-82.
三浦展, 2007, 『団塊世代の戦後史』文藝春秋.
宮崎正弘, 2010, 「池袋が中国人に乗っ取られる」『新潮 45』新潮社, 29(12): 40-47.
毛利和子, 2010, 『日中関係　戦後から新時代へ』岩波書店.
モーリス＝スズキ, テッサ, 2002[2013], 「現代日本における移民と市民権 『コスメティック・マルチカルチュラリズム』を克服するために」『批判的想像力のために　グローバル化時代の日本』平凡社, 169-198.
野村進, 2011, 『島国チャイニーズ』講談社.
水嶋徹, 2014, 「池袋北口チャイナタウン」『ジャパニズム』青林堂, 17:190-193.
大嶋えり子, 2015, 「国民戦線の勢力拡大と言説の変化」中野裕二／森千香子／エレン・ルバイ／浪岡新太郎／園山大祐編『排外主義を問いなおす フランスにおける排除・差別・参加』勁草書房, 60-62.
奥田道大／田嶋淳子, 1995, 『新版 池袋のアジア系外国人 回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店.
奥田道大, 1996, 「共生と隔離をめぐる社会学的実態」栗原彬編『講座 差別の社会学 第 2 巻　日本社会の差別構造』弘文堂, 118-137.
奥田道大／鈴木久美子編, 2001, 『エスノポリス・新宿／池袋 来日 10 年目のアジア系外国人調査記録』ハーベスト社.
奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場 越境するエスニシティと 21 世紀都市社会学』東京大学出版会.
梁英聖, 2016, 『日本型ヘイトスピーチとは何か 社会を破壊するレイシズムの登場』影書房.

菅原一孝, 1988, 『横浜中華街の研究』日本経済新聞社.
鈴木江理子, 2014, 「多様なルーツをもち日本で暮らす人々の『声』」『別冊 環 なぜ今、移民問題か』藤原書店, 20:158-183.
谷富夫, 2015, 『民族関係の都市社会学 大阪猪飼野のフィールドワーク』ミネルヴァ書房.
高史明, 2015, 『レイシズムを解剖する 在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房.
田村健男, 2011, 「新大久保 VS 西池袋『チャイナ』都の西北で勃発した『新異国街戦争』」『ジャパニズム』青林堂, 4:34-41.
譚璐美, 2008, 「華僑 三都物語」譚璐美／劉傑『新華僑 老華僑 変容する日本の中国人社会』文藝春秋, 17-149.
田辺俊介, 2011, 「ナショナリズム その多元性と多様性」田辺俊介編『外国人へのまなざしと政治意識』勁草書房, 21-42.
田嶋淳子, 1998, 『世界都市・東京のアジア系移住者』学文社.
————, 2003, 「トランスナショナル・ソーシャル・スペースの思想 中国系移住者の移動と定着のプロセスを中心に」渡戸一郎／広田康生／田嶋淳子編『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店, 47-79.
東京都総務局統計部, 2017, 「外国人人口 平成 29 年」
(2017 年 11 月 7 日取得,http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gaikoku/2017/ga17010000.htm).
山下清海, 2016a, 「ニューチャイナタウンの形成とホスト社会 池袋チャイナタウンの事例を中心に」山下清海編『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会 日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究』明石書店, 227-249.
————, 2016b, 『新・中華街 世界各地で〈華人社会〉は変貌する』講談社.
和田清美, 2006, 『大都市東京の社会学 コミュニティから全体構造へ』有信堂.
山田貴夫, 2017, 「なぜ、川崎・桜本がヘイトデモの標的にされたのか？」ヘイトスピーチを許さないかわさき市民ネットワーク編『根絶！ヘイトとの闘い 共生の街・川崎から』,9-31.
横浜開港資料館編, 1994, 『落葉帰根から落地生根へ 横浜中華街―開港から震災まで』横浜開港資料館.
吉見俊哉, 1992, 「シミュラークルの楽園 都市としてのディズニーランド」多木浩二／内田隆三編『零ゼロの修辞学 歴史の現在』リブロポート, 79-136.

［たき　だいち・和光大学大学院修士課程修了］